

2024/9/15

ルカの福音書 講解メッセージ②③

『ルカの福音書 9章 22-45節 不信仰で曲がった今の世だ』

## ■神は私たちの弱さを助ける

「そして言われた。「人の子は、必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、そして三日目によみがえらねばならないのです。」(ルカ 9:22)

イエス様は、私たちを助け、罪から救い出すためにこの地上に来られました。

この世界は、真理と偽りが争う世界です。真理とは変わらないものであり、神のことばであり、いのちです。しかし、この世界はその逆を語ります。命のないものを真実であるかのように語り、人を惑わせます。

神がよみがえらなければならなかったのは、死を打ち破り、この偽りを根本から壊すためでした。そのために、イエス様はご自身が死んでよみがえり、「死んでも生きる」ことを示す必要があったのです。

「イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」(ルカ 9:23)

イエス様についていきたいと願う者は「自分を捨てる」とはどういうことでしょうか。

私たちはこの世界で、自分を生かし、認められ、成功する方法を追い求めて生きています。しかし、それはこの世の価値観であり、聖書はそれを肉の思いと言っています。肉の思いとは、滅びる思いです。この世界に依存しているため、「どうすれば成功できるか」「どうすれば長く生きられるか」という思いに縛られています。イエス様は、その思いを捨てなさいと言われるのです。

では、「自分の十字架を負う」とは何でしょうか。それは、自分の弱さを認めるということです。人は皆、弱さを持ち、制約の中で生きています。この制約こそ、死が入り込んだ結果であり、悪魔がもたらしたものです。

初めの世界には死がなく、いのちだけがありました。死は、私たちの能力を制限し、

自由を奪い、弱さを生み出しました。聖書は、私たちが「死んだ者になった」と語り  
ます。

自分の十字架を負うとは、その弱さを背負って生きることであり、その弱さを誇り  
として生きるという意味です。

人は弱さを隠し、人の目を気にして生きています。しかし主は、「その弱さを隠さ  
ずに背負いなさい」と言われます。なぜなら、神の力は弱さのうちに働くからです。  
人の足りなさを補うのが神の恵みであり、弱さを表に出しなさいという言葉は、「で  
きないことは私が助ける」という神の愛の表れなのです。私たちは弱さがあるからこ  
そ、神の前にへりくだることができます。そのとき、神の恵みはその人のうちに豊か  
に働き始めます。

つまり、神の恵みは、「単独」なのです。神は、ほかの人のことは関係なく、「あな  
たと共に生きたい。あなたにできないことは、私が助けるから。」と願っておられま  
す。

私たちにできない決定的なこと、それは「生きること」です。死んでしまえば、誰  
も自分ではどうにもできません。だからこそ神は、「それは私がしてあげる」と言わ  
れます。神は、私たちを助けてくださる方です。

あなたは、自分の弱さを認めて生きているでしょうか。限界を知り、神に助けを求  
めているでしょうか。誰もが制約の中で生き、終わりの日が来ます。しかし、そのと  
き神に頼るなら、そこには希望があります。

「自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいの  
ちを失う者は、それを救うのです。」(ルカ 9:24)

「自分のいのちを救おうと思う」とは、「自分の力で生きようとする」ことです。こ  
の世では、誰もが自力で弱さを隠し、自分を高くしようとします。しかし、神抜きで  
生きる人生は、結局すべてを失ってしまいます。そこには神がないからです。神の  
ことば、すなわち、真理に従って生きる者は、確かに迫害を受けます。しかし、その  
結果は豊かであり、祝福に満ちています。神のことばが私たちを救うのです。神のこ  
とばが私たちのすべてです。

「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の得が  
ありましょう。もしだれでも、わたしとわたしのことばとを恥と思うなら、  
人の子も、自分と父と聖なる御使いとの栄光を帯びて来るときには、そのよ  
うな人のことを恥とします。」(ルカ 9:25-26)

永遠のいのちを持たなければ、たとえ全世界を手に入れても何の得にもなりません。すべては終わってしまいます。大切なのは、神のことばを恥と思わずに生きることです。

あなたの宝は、人の言葉でしょうか。それとも神のことばでしょうか。人の評価を気にし、神の言葉よりも人の言葉を大切にしていらないでしょうか。いつまでも残るのは神のことばです。それを恥とするなど、神は私たち一人ひとりに語っておられます。聖書の言葉は、今、あなたに語られている言葉です。あなたは、それにどう答えますか。

実は、弟子たちも神のことばを二の次にしていました。そのため、イエス様の言葉が理解できず、信じることができませんでした。彼らは、復活を「死後のこと」だと考え、「信じている者は死から命に移されている」と言われても、理解できなかったのです。

## ■復活は今起こっている

「しかし、わたしは真実をあなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、神の国を見るまでは、決して死を味わわない者たちがいます。」

(ルカ 9:27)

この言葉は、マルコの福音書では、「神の国が力をもって到来しているのを見るまでは、決して死を味わわない者たちがいます。」と記されています。「到来している」は現在完了形であり、「すでに来ている」という意味です。つまり、「イエス・キリストを信じている者がよみがえっているのを見るまでは、死なない者がいる」と言われたのです。

神を信じる者は、死んだあと墓で眠るのではありません。神の国に生き、復活のいのちに移されます。だから、住む場所が地上から神の国へ移るだけで、意識が消えるわけではありません。この事実を知るまでは死なない者がいる、イエス様はそう語られたのです。

「これらの教えがあつてから八日ほどして、イエスは、ペテロとヨハネとヤコブとを連れて、祈るために、山に登られた。祈っておられると、御顔の様子が変わり、御衣は白く光り輝いた。しかも、ふたりの人がイエスと話し合っているのではないか。それはモーセとエリヤであつて、栄光のうちに現れて、

イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期についていっしょに話していたのである。ペテロと仲間たちは、眠くてたまらなかったが、はっきり目がさめると、イエスの栄光と、イエスといっしょに立っているふたりの人を見た。」(ルカ 9:28-32)

弟子たちは、はっきりと目を覚ますと、イエス様の栄光と、すでに死んだはずのモーセとエリヤが生きて語り合っている姿を見ました。つまり、モーセとエリヤは、墓で眠っていたのではなく、よみがえり、神の国で生きていたのです。神の国はすでに到来していたということです。「神の国を見るまでは死なない者がいる」という言葉は、この出来事によって実現しました。神の国はすでに来ており、死者は眠っているのではなく、生きているという現実を、弟子たちは見たのです。

「それから、ふたりがイエスと別れようとしたとき、ペテロがイエスに言った。「先生。ここにいることは、素晴らしいことです。私たちが三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」ペテロは何を言うべきかを知らなかったのである。」(ルカ 9:33)

ペテロは、この地上に幕屋を建てようとしたのですが、彼らはすでに神の国にいる者たちでしたので、地上に幕屋を建てる必要はありません。

よみがえって生きている、つまり、神の国がすでに来ていているという現実を、ペテロは理解できなかったのです。

「彼がこう言っているうちに、雲がわき起こってその人々をおおった。彼らが雲に包まれると、弟子たちは恐ろしくなった。すると雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしの選んだ者である。彼の言うことを聞きなさい」と言う声がした。この声がしたとき、そこに見えたのはイエスだけであった。彼らは沈黙を守り、その当時は、自分たちの見たこのことをいっさい、だれにも話さなかった。」(ルカ 9:34-36)

ここで重要なのは、「イエスの言葉を聞きなさい。」と言われた神のことばです。それは、「イエスを信じなさい。」ということです。

弟子たちは、イエス様が苦しめられ、殺され、復活するという言葉を理解できませんでした。しかし、神の国はすでに到来しており、復活の世界は現実であることが、この出来事で示されたのです。

パウロはこの現実をこう説明します。

「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな、眠ることになるのではなく変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」（I コリント 15:51-52）

死んだら墓で眠るのではありません。終わりの時が来ると、一瞬のうちに神の国へ移されるのです。これが“奥義”です。

弟子たちの当時の常識は、「死んだら墓で眠り、終わりの日に一斉によみがえる」というものでした。しかしイエス様は、終わりの日は個人個人に来るものであって、一斉ではなく、個人として神の国に移されると教えられたのです。信じる者はすでに永遠のいのちを持ち、よみがえっています。だから、肉体の死と同時に神の国に移り住むことになります。

## ■信じる力は、神が与えてくださる

「次の日、一行が山から降りて来ると、大ぜいの人の群れがイエスを迎えた。すると、群衆の中から、ひとりの人が叫んで言った。「先生。お願いです。息子を見てやってください。ひとり息子です。ご覧ください。霊がこの子に取りつきますと、突然叫び出すのです。そしてひきつけさせてあわを吹かせ、かき裂いて、なかなか離れようとしません。お弟子たちに、この霊を追い出してくださるようお願いしたのですが、お弟子たちにはできませんでした。」  
(ルカ 9:37-40)

弟子たちは、この病気をいやすことができませんでした。彼らは、「本当にできるだろうか」という不安で、いやすことができなかったのです。当時、原因のわからない症状は悪霊の働きと考えられていました。しかし、いずれにしても、病気は死が入り込んだことで発生したものですから、悪との戦いです。

弟子たちがいやせなかった理由は、イエスの言葉を信じ切れなかったからです。「殺されて3日目によみがえる」と言われて、信じられなくなっていました。困難に見えることほど、人は信じるのが難しくなります。

そこでイエス様は、その子どもをご自分のところに連れてくるように言われました。

「ああ、不信仰で曲がった今の世だ。いつまであなたがたと共にいて、あなたがたに耐えなければならないのでしょうか。子どもをここに連れて来なさい。」  
その子が近づいて来る間にも、悪霊は彼を打ち倒して、激しくひきつけさせてしまった。それで、イエスは汚れた霊をしかって、その子をいやし、父親に渡された。」(ルカ 9:41-42)

イエス様はここまで、いろいろな病気をいやし、死人までもよみがえらせました。ですから、本来なら、「イエス様、あなたならできます。どうかいやしてください」と言うべきでしたが、誰もイエス様を信じ切れていませんでした。その子が近づいてくる間にも、状況はひどくなるばかりでしたが、イエス様はその子をいやし、父親に返されました。

「人々はみな、神のご威光に驚嘆した。イエスのなさったすべてのことに、人々がみな驚いていると、イエスは弟子たちにこう言われた。「このことばを、しっかりと耳に入れておきなさい。人の子は、いまに人々の手に渡されます。」しかし、弟子たちは、このみことばが理解できなかった。このみことばの意味は、わからないように、彼らから隠されていたのである。また彼らは、このみことばについてイエスに尋ねるのを恐れた。」(ルカ 9:43-45)

皆がこの出来事に驚いているその時、イエス様は弟子たちに「自分は、反対する者たちにつかまる」と伝えました。しかし、弟子たちには、まったく理解することができませんでした。それは、この言葉の意味が、彼らには隠されていたからです。

ということは、私たちが神のことばを信じることができるのは、神が助けてくれるからだということです。神が助けてくださらなければ、神のことばの意味がわからないし、信じることもできないのです。

つまり、私たちが神のことばを聞いて信じられるのは、神が助けてくださっているからです。聖霊が助けてくださっているのです。

「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ」と言わず、また、聖霊によるのであれば、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません。」

(I コリント 12:3)

つまり、神の言葉を信じる力は、自分の力ではなく、神が与えてくださるものなので

す。道徳的な教えなら、この世の人も理解できます。しかし、神についての真理は、聖霊の助けなしには信じることができません。

「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」(ヨハネ 14:26)

聖霊の助けがなければ、誰も信じる告白はできません。しかし、聖霊が働くとき、人はイエス様を主と告白できるようになります。

「さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」(ルカ 17:20-21)

神の国は、すでに到来しています。私たちは、すでによみがえって、死から命に移され、神の国の中にいるのです。そこは聖霊が支配する国なので、私たちは聖霊の助けを得られるようになり、信じることができるようになったということです。あなたがたは聖霊の宮であると言われた通り、イエス・キリストを信じた者たちは、すでに聖霊をもっているのです。それが、永遠のいのちを持っているということです。これが奥義です。奥義なので、いろいろな表現を使って、同じことが何度も語られています。

「神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」(コロサイ 1:13)

これは過去形で、あなたはすでに死からいのちに移されたと語っています。

「あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。」(コロサイ 2:12)

これも過去形です。「これからよみがえる」のではなく、「すでによみがえった者と

して生きている」と書かれています。

「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(Ⅱコリント 5:17)

あなたはすでに新しくされた者なのです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことなく、死からいのちに移っているのです。」(ヨハネ 5:24)

イエス・キリストを信じている者は、すでに永遠のいのちを持っていますから、終わりの日に肉の体を脱ぎ捨てて神の国に入る日を待っているだけです。それを信じるのが平安をもたらします。そのために大切なのは、人の言葉ではなく、神の言葉に目を向けることです。たとえ全世界を手に入れたところで、死からいのちに移されていなければ、何の意味もありません。ただ滅びるだけです。ですからイエス様は、自分を捨て自分の弱さを背負ってついてきなさいと言われました。自分の弱さを知り、弱さのうちに働く神の恵みに預かって生きるなら、イエス様が語られることばの意味がわかるようになっていきます。

こうして神のことばがますます信じられるようになり、心の中に平安が訪れるのです。この福音は、神とあなたとの関係であって、他の人がどう言おうと関係ありません。これがわかると、もう人の言葉に惑わされることはありません。

しかもイエス様は、信じることができなかった弟子たちに、実際に神の国を見せて励まされました。私たちも同じように、すでに神の国に移されている現実を信じることができるよう、聖霊様が助けてくださいます。